

2020年6月14日  
宮崎中部教会主日礼拝  
牧師 乾元美

レビ記 15 章 25～27 節

ルカによる福音書 8 章 40～56 節

「安心して行きなさい」

<二つの物語>

今日の聖書の箇所では、二つの物語が並行して語られています。

一つは、会堂長ヤイロの娘の物語です。ヤイロは、十二歳の一人娘が死にかかっていたので、イエスさまに家に来て下さるようにと願いました。それを聞いてイエスさまが向かって下さる道中、一人の女が近寄ってきました。この女の物語が、ヤイロの物語の間にサンドイッチのように挟まれています。この女は、十二年間、出血が止まらない病で苦しんでいました。しかし、イエスさまに近付いて衣の房に触れると、その病が癒されたのです。ところが、イエスさまとその女がやり取りしている間に、会堂長の娘は死んでしまったと連絡が入ります。しかしイエスさまは、そのままヤイロの家に向かわれ、死んだ娘を生き返らせて下さった。そういう二つの物語です。

この二つの物語の登場人物は、とても対照的です。

まずヤイロは、会堂長という役職を担っていました。これは、ユダヤ人が礼拝する会堂の責任を持つ者で、礼拝の奉仕者を指名したり、建物の管理をしたりします。ユダヤ人社会の中心である礼拝に関わる、とても重要な仕事です。ですから、人々の中から信頼と尊敬を集める者が選ばれました。まさに権威も名誉もある仕事です。

一方で女は、長期間出血が止まらない病を負っていました。女性特有の病です。この病の者は、今日お読みした旧約聖書のレビ記 15 章 25～27 節にあったように、汚れた者とされていました。彼女が使った寝床も、腰掛けもすべて汚れ、その物に触れた人まで汚れる、とされました。つまり彼女は、この病が治らない限り、社会の中で普通に生活すること、人々との交わりの中に入ることが出来ないのです。彼女は公の場、つまり礼拝に出席することも出来ません。礼拝が中心のユダヤ人の社会の中で、彼女はいつも共同体の外にいなければなりませんでした。もしかすると、病そのものの苦しみよりも、共同体の交わりに入れられないの方が、辛いことだったかも知れません。

共同体の中心にいるような会堂長ヤイロと、その共同体の外にいななければならない汚れた女。立場はまるで真逆です。

また、ヤイロの娘は十二歳とありました。十二歳で死んでしまう。わたしたちは、それはあまりに若すぎる、何て短い生涯なのだろうと感じます。

一方で女は、十二年もこの病を患っていました。共同体の中で生きることの出来ない十二年。礼拝から離れ、神とも人とも交わりを絶たれた十二年。彼女にとっては、果てしなく長

く続く苦しみの日々であったに違いありません。

同じ十二年でも、幼い娘にとっては短く、病に苦しむ女にとっては長い年月です。この点も両者はとても対照的です。

しかし、両者には共通点があります。それは、全く違う十二年間を歩んできた両者ですが、今、どちらも絶望的な苦しみの中にあるということです。そして、その苦しみの只中で、イエスさまと出会ったということです。

娘は死にかけていました。まさに命が終わろうとしていました。女の出血も、血には命が宿るとされていましたから、命が流れ出し、どんどん尽きていっている状態ということです。どちらも命が失われていくことに対して、もはや何も出来ない状態にあった。

そこにイエスさまが来て下さり、女の命が尽きていくのを止めて下さった。また娘の失われた命を取り戻して下さった。ここには二つの物語を通して、イエスさまが命を支配なさる神の御子であることが語られているのです。

#### <出血が止まらない女>

さて、本日は女の物語を見ていきたいと思います。42 節には、イエスさまがヤイロの娘のために向かっておられる途中、群衆が周りに押し寄せて来た、とあります。その群衆の中に、十二年このかた出血が止まらず、医者に全財産を使い果たしたが、だれからも治してもらえない女がいました。婦人科の病は医者に診せるだけでも苦しみがあるでしょうが、それでも治らず、全財産も使い果たした。病そのものの苦しみ、汚れた者とされて共同体の交わりに入ることが出来ない苦しみ、そして経済的な苦しみまで、この女は担っていたのです。

そこに、女はイエスさまのことを聞きつけたのでしょう。イエスさまなら、自分の病を癒し、汚れを清めて下さるかも知れないと思った。それで、彼女は群衆に紛れてイエスさまに後ろから近付いたのです。これはとても大胆な行動です。汚れた彼女が触れたものは汚れてしまうのですから、群衆の誰かにばれてしまえば、どれだけバッシングを受け、酷い目に遭うか分かりません。しかしまた、自分がそのような病だからこそ、ヤイロのように、イエスさまの足元にひれ伏して堂々と願うことも出来なかったのです。

女は何とかこの苦しみから救われたいと願っていました。そこに、イエスさまがやって来られた。神の言葉を教えておられるお方。救いの知らせを告げておられるお方。そして、多くの人々の病を癒し、汚れを清め、悪霊を追い出しておられるお方。このお方なら、自分の病を癒して下さるかも知れない。苦しみから救って下さるかも知れない。女は藁にも縋る思いで、一縷の望みをかけて、イエスさまの衣の房に触れたのではないのでしょうか。

すると、女の出血は直ちに止まった、とあります。女の願い通り、病は癒され、汚れは清められたのです。後は、病が癒されたことを示して、汚れを清める贖いの儀式さえすれば、共同体に戻ることが出来ます。これでまた彼女は、人々と共に礼拝し、人々と交わることが出来るのです。

<本当の救い>

おそらく彼女は、もうこれで、こっそりこの場を立ち去るつもりでした。一刻も早く離れたかったのではないのでしょうか。もし人に見つかったら、「汚れた者がどうしてここにいるのか」と咎められます。しかもこの群衆の中、色々な人に触れてしまっているし、ましてやイエスさまに触れたということが知れたら、どれだけ叱られるか分かりません。

ところがイエスさまは、「わたしに触れたのはだれか。」と言って、この女を探し始められたのです。多くの人々が、イエスさまの周りに押し寄せて、押し合いへし合いしています。弟子のペトロは、「先生、群衆があなたを取り巻いて、押し合っているのです。」「群衆がこれだけあなたを取り巻いているのだから、『触れたのはだれか』なんて分かるはずがありません。みんなあなたに触れているではありませんか。」そんな風にイエスさまに言いました。

しかし、イエスさまはこう言われます。「だれかがわたしに触れた。わたしから力が出て行ったのを感じたのだ。」

女は隠しきれないと知りました。イエスさまはわたしをご存知だ。イエスさまはわたしの存在を知っておられる。そのことを女は知ったのです。それで、彼女は震えながら進み出てひれ伏し、触れた理由とたちまちいやされた次第とを皆の前で話しました。

彼女は震えながら、とあります。恐ろしかったに違いありません。病を衣の房に触れただけで病を治すお方です。偉大な力を持っているお方です。その神の力を持つ方に対する恐れ。そして、汚れた者であるのに、この聖い方に触れてしまったという恐れです。

わたしたちは、人目を避けて来た女を人前に出させるなんて、イエスさまはちょっと酷だと、思ってしまいます。

ところが、イエスさまはこう言われました。

「娘よ、あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい。」

「あなたの信仰があなたを救った。」これは、どういうことなのでしょう。

これは決して、女が正しい信仰を持っていたとか、信心深い者だったとか、それこそ、汚れなき生活を送っており、救われるにふさわしい信仰生活をしていた、ということではありません。むしろ、レビ記の律法に従うならば、汚れていて、神さまに礼拝を献げることも出来ない、もっとも神から離れた、もっとも救いから遠い者だと言えるのです。女はむしろ、何も持たず、何も出来ず、ただただ無力と弱さの中にありました。

しかし、救いを他でもないイエスさまに求めました。癒しを求めてイエスさまに頼りました。そして、今イエスさまに呼ばれたことに応じて、御前に進み出て、触れた理由とたちまちいやされた次第を皆の前で話しました。

イエスさまはこれを、「あなたの信仰だ」と言って下さったのです。イエスさまに頼り、イエスさまに求め、イエスさまに尽きてゆく命を生かしていただいた。そしてそれを、人々

の前で認め、告白した。それが「信仰」なのです。

イエスさまは、この女が、背後からイエスさまに黙って触れて、病を癒されて、イエスさまと正面から出会う事なしにその場を立ち去ることを、お許しになりませんでした。

もしそのまま立ち去ったなら、病は癒されたかも知れませんが、それはただこの時、奇跡的な癒しを与えられただけで終わってしまいます。

ここにイエスさまが与えようとしておられる救いとは、どういうものかが示されています。

確かに、病というのは、苦しく、耐え難く、辛いものです。しかし、それを癒されることそのものは、その人にとっての一時的なことです。人はまた病を得ますし、年を取りますし、体は弱り、いずれ死に至ることに変わりはありません。もちろん、癒しや、平安を祈り求めて良いのです。でも、ただ癒されることや、苦しみが無くなるのが、救いそのものなのではありません。

ここで大切なのは、女が病を癒されたということだけでなく、神の子であるイエスさまと出会い、イエスさまとの交わりを与えられた、ということです。

女は、癒されました。恵みを与えられました。そしてさらに、イエスさまが自分を知っておられることを知りました。そして、イエスさまの前に出て、向かい合うことを求めておられると知りました。だから女は震えながらも、イエスさまの御前に出て、この呼びかけにお応えしたのです。皆の前で、自分とイエスさまとの関わりを告白したのです。

ここに、救いがあります。救いとは、神さまとの交わりを与えられることであり、神さまと共に生きることだからです。与えられた恵みに応えて、イエスさまをわたしの救い主であることを受け入れ、認め、イエスさまに従っていくことだからです。

そしてそれは、神さまを礼拝する者となる、ということです。病が癒えて、汚れがなくなって、法律上、形式的に礼拝に参加できる、ということではありません。命を与え、救いを与えて下さった神さまと向き合い、応答し、共に交わる礼拝です。

神の御子イエスさまは、まさにこのご自分との交わりを、本当の救いを、この女に与えて下さったのです。神さまを礼拝して歩む人生。神さまと共に生きる人生。この神との交わりこそ、人間としての本当の回復であり、本当の癒しであり、本当の救いなのです。

女は病の癒しを求めましたが、癒されれば立ち去ろうとしていました。癒しささえいただければ、それで十分。交わること、この方と関係を築くことなど、思ってもみなかったかも知れません。それは、「信仰」などと呼べるものではなかったかも知れません。

しかし、イエスさまが、本当の救いへと導いて下さいました。出会い、呼びかけ、交わりを望んで下さいました。

そして、女がイエスさまに向かい合った時、イエスさまの呼びかけに応えた時、イエスさまは言って下さるのです。「あなたの信仰があなたを救った」「あなたはわたしを求めた。そ

れでよい。わたしに頼った。わたしに委ねた。それでよい。わたしはまことの救い主だ。わたしはあなたと出会い、あなたを担い、あなたを救おう。わたしはあなたと一緒にいよう。」

癒されること、苦しみが無くなることが救いなのではありません。この方が共にいて下さることが救いなのです。他にもない、命の主、神の御子が、わたしの救い主となって下さる。この方が共にいて下さる。イエスさまはまことの救いを与えて下さいます。そして、イエスさまはそれを「あなたの信仰」と言って下さる。わたしたちはそれを、「わたしの信仰」と言うことが出来るのです。

<安心して行きなさい>

そしてイエスさまは言われました。「安心して行きなさい。」

この「安心」という言葉は、平和、平安という言葉です。平和とは、ただ穏やかとか、争いがない状態のことを指すのではありません。聖書では、神との平和。神と和解すること。神と共にあることを意味します。

安心して行きなさい。あなたは神と共にあるから、わたしと共にあるから、まことの平和のうちに人生を歩んで行きなさい。イエスさまは、そう言って下さったのです。この女には、今後、また苦しみや、悲しみや、困難があるかも知れません。でも、もう彼女は、この命の主が、神の御子イエスさまが、いつも共にいて下さることを知っているのです。

イエスさまは、わたしたちとも、出会って下さり、交わって下さり、神さまと共に生きる者、神さまを礼拝する者へと導いて下さいます。イエスさまはわたしたちの弱さも、罪も、破れも、死も、すべてを受け止め、十字架に架かって下さいました。そして、復活し、まことに命の主となって下さいました。そして、わたしたちの名を呼んで御前に立たせ、まことの救いへ、神との交わりの中へ、招いて下さっているのです。イエスさまは、わたしたちが御前に立ち、救いの恵みをいただいたことを受け止め、認め、イエスさまと共に生きる者となることを望んで下さっています。

この方の招きにお応えして主の御前に入る時、わたしたちは神さまとの交わりを与えられ、礼拝の恵みを与えられ、イエスさまと共に歩む人生を与えられていきます。わたしたちには、かつて望んでいた以上のもの、つまり、イエスさまご自身が与えられるのです。

そして、罪も、苦しきも、悲しみも、死も、すべてを覆い尽くして下さる、命を支配なさる神の御子の癒しの御手の中に置かれて、まことに安心して歩んでいくことができるのです。

## 【お祈り】

命の創造主なる天の父なる神さま

神の御子イエスさまが、あなたから遠く離れたわたしたちを求めて下さり、出会って下さり、交わって下さり、信仰を告白する者へ、神を礼拝する者へと招いて下さいますことを、心から感謝いたします。あなたが与えて下さる救いを、十字架と復活の救い主イエスさまを、感謝して受け入れ、御前に立ち、イエスさまと共に生きる者とならせて下さい。

わたしたちの歩みには、なお罪がまとわりつきます。また、病も、苦しみも、悲しみもありますけれども、十字架と復活の主、罪を赦し、命を続べ治められるイエスさまが、いつも共にいて下さることを信じ、まことに安心して、行くことができるようにして下さい。

このお祈りを命の主、イエス・キリストの御名によって祈ります。アーメン